
オカルト研究部と神隠し村

千琴 羽跡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オカルト研究部と神隠し村

【Nコード】

N2099P

【作者名】

千琴 羽跡

【あらすじ】

雲丘高校オカルト研究部。

近隣の住民などからは、猫探しやなくした物の搜索などの活動から評判が良く、学校の生徒からは何でも屋部と呼ばれている。

部員の3／4は活動内容を何でも屋的活動だと考えているが、部長だけは、オカルティストたるものの使命に則して活動していると勘違いしている。

そんなおかしな部活の話。

プロローグ（前書き）

まだまだ文章を書き慣れておらず、小説として未熟な面、稚拙な文が多々見受けられるとは思いますが、どうか暖かい目で見守ってやって下さい。

※筆者はオカルトマニアではありません。

※寧ろそういう類のものは基本的に信じておりません。

※故に、こういった類のことは浅学ですので、間違いがあればご指摘頂けると幸いです。

※しかしながら、血液型性格診断然り、こういったものはエンターテインメントとして楽しむ方針で日々過ごしています。

それでは、どうぞごゆるりとお楽しみ下さい。

プロローグ

誰もが耳にしたことはあるだろう。

オカルト。

occulta。

ラテン語のocculereの過去分詞。隠されたものという意味で、視覚や触覚などで認識できないもののこと。

オカルトなんて言葉を聞くと、胡散臭いだの、非科学的だの、そんな言葉が飛び交うが、そういったものを頭ごなしに否定するのは如何なものだろうか？

よし、わかった。一先ず、お化けや幽霊について考えてみよう。大半の人はそんなものの存在は信じていないだろう。この後に書いてあることは、その類のものを信じている人は何となく流し読みしてくれたらいい。多数派の君たちは、心霊写真？光の加減だろ。だとか、轆轤首？首が伸びるだとか飛ぶだとか、ちゃんちゃら可笑しい。だとか、火の玉？目の錯覚だって。だとか思っているだろう。その君たちの考え方を否定はしない。実際多くはそうに違いないから。

じゃあ、次に想像してみよう。

君は真夜中に、墓地の暗闇の中で独り。陽が昇るまでそこから出られはしない。おっと、携帯を開こうとしても駄目だよ。君は携帯などの、所謂近代文明的なものは一切持っていないんだ。君の背後

でかさこそと音がする。勿論ただの風だが、君は振り返らずにはいられないよね。

しかも恐怖を以て。

次に君は、等身大のフランス人形が数百体、座ったり立ったり、丁寧に並べられた部屋に要るとしよう。こっちも夜中、薄暗い部屋だ。だだっ広いのに蝋燭が四隅に漂っているだけ。ひゅうとすきま風が吹き込む。君の肩に一体の人形が倒れ込む。慌てて支えようと、その首がごとんと音を立てて下に落ちる。君はその首と目が合うんだ。なんてことないだろう。ただすきま風でもともとバランスの悪かった人形が倒れて、その衝撃で首がとれた。そして、首が転がって君の方を向いたただだよ。もしその状況になってごらん？驚くよね。

更に、恐怖するよね。

どうしてだろう？なんにも非科学的なことは起きていない。この状況で君たちは恐怖を抱くんだよね。この例で怖くないって人、嘘はよくないよ。恐怖の多寡はあるにしろ、少なからず怖いって感情を抱いているよね。暗いから怖いだけだって？じゃあ、君は寝る時に毎度毎度恐怖を感じているの？それは大変だね。お墓だから？じゃあお墓の何が怖いのか？君たちがお化けの類を否定する理由のように言えば、お墓はただ亡くなった人の遺骨を入れて、その上に立てる立派な石ってもんだよ。人形においては、人間を連想させるから気味が悪いっていう言い方もできるだろうけど、果たして本当にそれだけが理由？別に、亡くなった人は動きはしないし、石に至ってはただの無機物だよ？人形もまた然り。

じゃあ、何が君たちを怖がらせているんだろうか？

誰もが耳にしたことはあるだろう。

オカルト。

occulta。

ラテン語のocculereの過去分詞。隠されたものという意味で、視覚や触覚などで認識できないもののこと。

オカルトなんて言葉を聞くと、胡散臭いだの、非科学的だの、そんな言葉が飛び交うが、そういったものを頭ごなしに否定するのは如何なものだろうか？

1. 合宿

「イチ君、暑いよ」

一。無論、僕の名前である。

「暑い：ですね」

「イチ君も暑い？じゃあ合宿しようよ、合宿！」

「いや、何がどう『じゃあ』なんですか」

寝そべって、身体の火照りを机に分けていた秋人が、おもむろに起き上がり、のっそりという音を立てているかのように動く。

「何って避暑地に合宿ってことだよ」

「オカ研で合宿なんて聞いたことないですよ」

「ほら秋君、もっと柔軟な発想を身につけないと、一人前のオカ研部員にはなれないよ？奇々怪々な物事を解き明かすには、広い視野をもって想像力を働かせることが大事なんだから」

「ならなくていいですよ」

そう言うのと、机が暖まったのか、秋人は寝場所を変える。

「まったく、それだから平部員なのよ。副部長のイチ君は違うよね？」

僕は二番目に入ったから副部長になったというだけで、熱心なオカ研部員なわけでは決してない。ただゆず先輩の吸い込まれそうな瞳の黒を前に答えあぐねていると、部室のドアが力なく開いた。

「暑い」

暑さに体力を奪われ乾涸びたもやのような表情をした舞は、ドアの脇にある金属ロッカーに頬を寄せながら、

「暑い」

とだけ言った。

「あら、舞ちゃん早かったのね」

「暑い」

「舞ちゃん、合宿行きたくない？」

「暑い」

「暑いっていうことは、暑いから避暑地への合宿への参加をしますって捉えていいよね？」

「暑いから直ちに避暑することを希望しますって捉えて下さい」

「直ちに合宿に行きたいのね！」

「直ちにファミレスに行くか帰るかしたいです」

「もー、みんなだらしがないなあ」

何故先輩は暑くないのだろうか。

「涼しい！」

ファミレスに入った途端に舞がいつもの調子に戻ったようだ。とりあえずドリンクバーを頼むと、秋人が口を開いた。

「それで、こんな糞暑い中集まった理由はなんですか。また猫探しとかだったらキレますよ？」

オカ研で猫探しというのは変に感じるかもしれないが、ゆず先輩が何でもかんでもオカルトに繋がたがるせいで、我らがオカルト研究部は半分何でも屋のようなことをしていて、校内や学校近辺ではそういう意味で有名なのだ。

「だーかーらー、合宿だったら！」

突然だが、ゆず先輩は美人だ。肩までの艶のある黒髪、底のない真っ黒な瞳、スレンダーな体型、少し身長が低めで子供っぽい仕草はさらなり。間違いなく校内でも指折りの美人だ。喋らなければ。

「あの時は、猫がいなくなったって相談箱に何件か入ってたから、これは同時多発的にキャトラれたに違いないって思ったんだもん。しょうがないじゃん」

キャトルミューティレーション。一昔前に騒がれた動物の惨殺事件。死体の一部が切り取られていたり、血液が空になっていたりという異常性から宇宙人の仕業だだの、そう言えば事件直前に未確認飛行物体と思わしき物を見ただの真しやかに囁かれていたが、質の悪い冗

談で、アメリカの広大な農場の敷地で病死した牛の乳房など柔らかいところを鷲などが啄み、重力で流れ出る血液が地面に吸われていたというだけのことだ。今となってはただの都市伝説であり、突っ込みを入れることすら憚れる。

「キャトるって先輩はいつの時代の人間ですか」

おおまた律儀に。

「舞ちゃん、キャトルミューティレーションは色々な考察がされてるのよ。例を挙げれば、宗教団体説。黒魔術に関係したカルト教団が儀式的に行っているという説よ。あと有名な宇宙人説。他にも軍事・政治的思惑があったんじゃないかって説もあるわ。それなのに無理矢理科学的に説明した一番ナンセンスな説を鵜呑みにするなんて、勿体無いし、早計も早計よ。何より、夢がないわ」

その偏った知識はどこから拾ってくるのだろうか。第一、オカルトを研究する部活において、物事を夢で語るな。

「とにかく！合宿よ合宿！」

「先輩は合宿がしたいだけでしょう？先輩、夏の課題は終わったんですか？」

そう、今は夏休みである。

「そうよ、悪い？私にかかれば課題なんて、あって、ないようなものよ」

舞と先輩が言い合ってる間に、じゃんけんに負けた秋人がお盆に乗せた飲み物を運んできた。

「あって、ないようなものなら、どうして先輩は2回目の高校2年生を満喫しているんですか？」

僕らにとって先輩は、先輩であって同級生なのだ。まあ、簡単に言うと言っているわけだ。

「ちよっと、イチ君聞いた？今の！舞ちゃんひどいよっ」

「いや、留年したゆず先輩が悪いと思います」

「イチ君まで?!秋君ー」

「ほら、合宿なんかしたらまた留年しますよ」

「みんなしてひどい：ひどいわ」

というか、

「先輩って何で留年したんですたっけ？」

「友、聞くだけ無駄だ」

友。無論僕の名前である。一はどうしたのかって？僕のこのはた迷惑な名前をフルネーム表記すると、一友。多くの人は、フルネームだって言ってるのに、「え？：かずとも君？」だとか的外れなことばかり言う。名字だけ書いてあったら、「はじめ君？いち君？」両方違う。体育の先生なんて、「おいお前、体操服の胸のところは名字を書くんだ。なんだその横棒は？」なんて言って退けた。失礼極まりない。人の名前をなんだとおもっていやがる。僕は一友。「にのまえ とも」だ。先輩と舞は面白がって僕のことをイチと呼ぶ。「え？どうして？」

「いい？イチ君。私は宇宙人に連れ去られたせいで出席日数が足りなかったのよ！だから、頭が悪くて留年したんじゃないの！」

「友、翻訳すると、『いい？イチ君。宇宙人の仕業かと思う程きつい食中毒で病院に連れて行かれ、入院。そして退院後、食中毒の痛みに怯え軽い拒食症に。そして体調を崩しては欠席、崩しては欠席を繰り返していたら、出席日数が足りなかったのよ！』だ」

「ちよっと、頭がのくだりはどこに行っただのよ！」

「いや、頭は悪いじゃないですか」

「……！」

流石の先輩も少し面食らったみたいだ。まあ、秋人と比べれば頭悪いってなっても仕方がないだろうけど。

「あーああ。『ゆず姉！ゆず姉！明日花火しようよ、花火！！』って言ってた頃の可愛い秋君はもういないのね……」

「何年前の話をしてるんですか」

「いつの間にかゆず姉が先輩に。タメ口が敬語に……ゆず姉、悲しいわ」

言うまでもないが、ゆず先輩と秋人は幼なじみだ。家は今でも隣

の隣らしい。

「合宿ったって経費、合宿先、合宿の目的がないと、いくらアホ太郎でも認めてくれないでしょ」

アホ太郎こと、寺内光太郎は我がオカルト研究部の顧問である体育教師だ。一言で表すと脳筋。座右の銘をシンプル・イズ・ベストにするあたり、自覚しているんじゃないかとも思えるが、単に頭が悪いだけのようだ。

「大丈夫よ、舞ちゃん。聡明なゆず先輩は既にその三つは達成済みなのです！というか、合宿の目的を光太郎先生に言ったら、残りの二つはどうにかしてくれました！」

ああ、アホ太郎乗せられたな。

「ここから電車で一時間程度揺られたところにある山に、神隠し村の伝承がされている山があるんだよ！聞くところによると、一日で忽然と姿を消してしまった村らしいのよ！どう？行きたくなかった？」
目をキラキラさせてという言葉そのままの顔をして僕らに目を向ける先輩。

「いや：軽音部の練習あるんで」

「そんなはずないわ。軽音の秋君の所属するバンドのドラムの子は、つい先日腕の骨を折ったはずだもの。折れた腕でドラムなんて叩けないでしょう」

「いや、サポート呼んで：」

「目が右に泳いでる。早口。口元を隠してる。御存知の通り嘘をついてる時によく見られる行動だよ。よし、秋人は大丈夫ね」

ゆず先輩の視線が舞へ飛ぶ。

「舞ちゃんは兼部してないし行けないわけないよね？」

「えっ：いや、おっおばあちゃんが入院してるんです！」

「昨日舞ちゃんのお母さんとおばあちゃん、二人でスーパーにいたわよ」

「もっともう片方のおばあちゃん」

「あれ？もう片方のおばあちゃんは去年亡くなったって5月頃に言

つてたよね？」

「記憶違いじゃないんですか？」

「じゃあ今から舞ちゃんのお家に電話してお尋ねするわ」

「ごめんなさい」

「よし、決まりね！」

「えっ？僕は？」

「イチ君はいつでも暇でしょ」

この会話からも推測できるように、我がオカルト研究部は部員4人のうち、やる気があるのは先輩だけだ。1回目の2年生の始めにオカルト研究部を立ち上げることを決意した先輩は、部室棟の元文芸部の部室を勝手に片付け、目が合ったという理由で僕を副部長に、中学の同窓会のことと僕を訪ねてきた舞を会計に、幼なじみの秋人を半強制的に入部させ部員に。そして当時担任だったアホ太郎に相談すると、なんて自主性のある素晴らしい生徒達なんだ！ということで部室は認められ、アホ太郎が顧問に就任。部活がまともに動き始めたのは去年の今頃で、二ヶ月ほどは何でも屋のようなことをして、先輩の登校拒否のおかげで十月から一月までの四ヶ月は平穩に生活し、二月からはずっと何でも屋のようなことをしてきたというわけだ。

「明々後日から3泊4日だから、ずる休まないように！」

明々後日って急だな、おい。

「ちよっと、先輩お金は？」

「田舎の宿だからそんなに高くないってことで、独身お金持ち光太郎先生が全部もってくれました！だからみんなは、この紙に書いたものと合宿の用意だけちゃんとしてね！」

嗚呼哀れなアホ太郎。生徒に出し抜かれ、よくわからない部活のお財布役になっているだなんて。

こうして僕らは合宿をすることになった。

『懷中電灯に方位磁石、発煙筒、山で活動し易い装備、持ち運びし易い携帯食料、3泊4日の旅の用意』この辺までは分かるんだけど、『ペンタクル、インク、羊皮紙、羽、蠟燭、その他魔除け道具各種（ニンニクや銀製のもの、十字架など）』…何だ黒魔術でもしに合宿にいくのか。ニンニクや銀製のものって…神隠し村じゃなくてドラキュラ城に乗り込むみたいな装備だな…あの先輩絶対何か間違ってる。

2. 到着

「……ド田舎」

舞が蝉の声に掻き消されそうなトーンで呟く。

「いかにも神隠しにあった村がありそうね!」

「なんでそんなに元気なんですか」

「今からオカルティストたるものの使命を果たすのよ! 誰だって元気になるわ!」

まあ、先輩くらいのものだろう。

「何が電車で一時間だ。新幹線三十分に電車四十分。どんだけ遠くだよ」

秋人がぼやく。同感だ。オカルト研究部なんかのよくわからない夏合宿で行く距離じゃない。というか、

「先輩、そういえばアホ太郎はどうしたんですか?」

「先生はおばあ様が危篤だそうで、引率出来ないそうよ」

「高校生が部活の合宿を顧問無しで勝手にやっていいんですか?!」

「先生に許可を頂いたから大丈夫よ」

どうせアホ太郎のことだ、何も考えずに許可したんだろう。山の探索に行くってのに、もしものことがあったらどうするつもりなんだ。流石はアホ。

「先生、何も言わずに許可しちゃったんですか??」

舞が尋ねる。

「もっ…もちろん…先生に私から…その…男…女…の過ちは絶対に起こさないって言ったわ! しかも、男女別室だから…大丈夫よ!」

いやいやいや、そういう意味じゃないから。何顔真っ赤にして頓珍漢なこと言ってるんだこの先輩は。

「誰もそんな話してないですよ」

「柚先輩エッチー」

先輩の顔がみるみる紅くなる。

「イツ、イチ君二人がエッチとかいうよお！」

「柚先輩、エッチ」

「!!!」

先輩は真っ赤な顔で俯いてしまった。こういうところを見ると可愛いんだが。

「うわ、携帯の電波入ったり消えたりしてるぞ」

秋人が画面をこちらにむけてくる。確かに、ギリギリ圏外じゃない程度だ。

「先輩、とりあえず旅館行きませんか？私溶けそうですよ…」

そう言って舞は煩わしそうにポニーテールを持ち上げる。

「電波が入らないのは、オカルト的な何かが働いている可能性があるわね…」

ないから。

「先輩、旅館までの地図とかあるんですか？」

「ないけど、覚えたから大丈夫！」

柚先輩は記憶力がいい。歴史や現代社会などの単純暗記系教科のテストでは、前日の夜教科書に軽く目を通すだけで満点をとってしまような記憶力だ。模試となると、まともに勉強するから何度も全国一位をとっている。そりゃ百点とれば全国一位は当然だ。だが、数学をはじめとする理系教科、英語はてんで駄目だ。てんで駄目とはいえ、一応、雲丘高校は俗に言う進学校というやつなので、まあ、その程度だということだ。

その先輩の記憶力を頼りに、僕らは旅館へと向かった。

この後、確かな記憶力を補って余りある、方向音痴のせいで、旅館到着までには通常の三倍程度の時間がかかった。舞は終始乾涸びるとぼやいていた。

到着したのは案外立派な旅館だった。もともと大きな日本家屋だ

ったところを旅館にしたという話だ。近くに（言う程近くはないが）温泉もあるということで、どうにか細々と経営しているらしい。

「ようこそ、おいでくださいました」

物腰の柔らかい、齢四十程度に見える綺麗な女将さんが出迎えてくれた。後から聞いた所、四十八歳らしい。

「雲丘高校のオカルト研究部の者です」

「二部屋ご予約頂いておりますね、すぐにご案内致します。こちらへどうぞ」

案内されたのは、小綺麗な隣り合った二部屋だった。

「夕食はいかがなさいますか？」

「えっと、こっちの部屋に四人分お願いします。時間は…」

今日はもう夕方近くなってしまったので、温泉に入って、夕食を食べながら、明日の計画を立てて終わりということになった。

旅館にも小さいながら温泉があるということで、そこに入ることにした。

「ふああ、温泉やっぱりいいなあ。ああ、そうだ。友？」

「何？」

「お前ギター弾いてんのか？」

「一応毎日触ってるけど」

秋人と僕は中学時代の軽音楽部仲間だ。

「やっぱりさ、バンド組もうぜ。お前くらい弾けるギターなかなかいないんだって」

「高校は平穩に過ごすことに決めたって言ったろ？」

父親の趣味で小さい頃からギターを弾いてる僕は、人よりそこそこ弾けると自負していたりする。

「頼むよお」

「いいじゃんお前ギターボーカルで3ピース組んでるんだろ？」

「俺ギター駄目だよっぱり。歌うのだけに集中したいもん」

「練習しろ練習」

「ちえっ」

「そうだ、舞ってまだドラム叩いてんのかな？」

「さあ？けど家に電子ドラムあるし叩いてるんじゃないの？」

中学時代は、僕がギター、秋人がボーカル、舞がドラム、あと東京に引っ越して行った友人がベースでバンドを組んでいた。

「懐かしいなあ」

「懐かしく思うんならまた組もうぜ！」

「やだったら」

「お前のテレキャスが泣いてるぜ？」

「ギターは鳴るけど泣かないから」

「おっ上手いこと言ったつもりか？おい」

そんな話をしていたら、長風呂してしまったみたいで、上がった時には女性陣はもう髪を乾かし終わっていた。

夕食もそこに明日の予定を決める。といっても、起きる時間、出発時刻、どのくらい探索を続けるのか、程度のものなのだが、

「とりあえず、夜中二時に山に乗り込むわよ」

「なんでだよ。」

「柚先輩、お化け探しじゃないんですから、夜中に行かなくていいじゃないですかあ。私朝にまた温泉浸かりたいですー」

「駄目よ。絶対夜中の二時には探索を開始するのっ」

「どうせ、」

「先輩は、夜に探検的なことがしてみたいだけですよね」

「そっ、そんなことないわよ、オカルトの研究にあたって一番良い時間だと思ったから提案しただけよ！」

「即座に秋人が口を開く。」

「目が右に泳いでる。早口。口元を隠してる。御存知の通り嘘をついてる時によく見られる行動ですよー。よし、凶星ですね」

「じゃあ昼からにしよう。お昼ご飯持って行ったり面倒だし」

「いーねー、そうしよう！これでゆっくり温泉を楽しめそう」

「じゃあ一時にロビーな」

先輩があうあう言っている間に、明日の予定が決まった。

「ダメよ！これはいるの！！」

「山登るのになんでペンタクルがいるんですか！しかもこんなにとでかいの！！」

先輩は、円形の蛍光灯程度のサイズのペンタクルを胸に抱えて離さない。どこでそんなもん仕入れてきたんだ。

「お守りにしてもでかすぎるでしょ！」

秋人が奪おうとするが、先輩は意地でも離さない。

「あっ秋人！まだあったー！」

舞の右手にはA4紙サイズの十字架が握られていた。

ペンタクルは二つ目。十字架に至っては三つ目だ。しかも全部馬鹿でかい。

「なんでこんなにあるんですか！」

「お守りよ、お守りっ！」

ペンタクルを奪われた先輩は膨れっ面だ。可愛い。

「お守りなら、こんなにでかい必要ないでしょ！！」

尤もだ。

「だって、大きい方が効力強そうじゃない！！『大は小を兼ねる』よっ！」

滅茶苦茶だ。

「兼ねませんっ！！」

何でこんなことになっているかというのと、先輩のリュックサックのジッパーが空いているのを見つけた舞が先輩に声をかけたところ、肩ひもを外し身体の正面に持ってくる動作の途中、秋人に激突。あまりの衝撃に秋人吹っ飛ぶ。どう考えてもあり得ない衝撃に秋人がおかしいと思い、鞆を開けようとする。急いで秋人を止めようと先輩が飛びつく。二人がごちゃごちゃしている間に、舞が鞆をオープンしたところ、出てくる出てくる。

「この十字架とかデカ過ぎでしょ」

……！……？……軽っ？

「先輩、十字架って銀製じゃないんですか？」

「何言ってるのよイチ君？どう見ても銀製じゃない」

「先輩これどこで買ったんですか？」

「駅前露店よ。純銀製で、その昔、著名な霊媒師が片時も離さず持っていたほどのもので、魔除けの効果は絶大だって言ってたわ。何より、売ってた人が黒魔術師だそうよ」

うっ、胡散臭ええええ。

「いくらだったんですか？」

「それが、私に、途轍もない霊的感覚の強さを感じる。きっと貴女には重大な命が使わされてるに違いない！って言って、半額の二千元で売ってくれたのよ！」

騙されてるわ。この人。完全に騙されてるわ。

「先輩、パスッ！」

えっ、嘘っ、と言いながら先輩は丁寧にキャッチする。

「ちよっ、イチ君危ないじゃない！魔力の強い物を落としたりしたらどうなることか！罰が当たったらどうするのよ！！」

「先輩、それ銀にしては軽くないですか？」

えっ、と言って少し考え込み、先輩は俯いてしまった。流石に気付いたに違いない。舞は可哀想なものを見る目で先輩を見ている。

先輩の荷物も軽くなったところで、山に向けて出発した。そろそろ柚先輩の誕生日が近いし、プレゼントには銀製の十字架のネックレスか何かを買ってあげよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2099p/>

オカルト研究部と神隠し村

2011年1月30日02時40分発行